

東京白楊だより

第19号
平成8.8.30



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校



ごあいさつ

白楊ヶ丘同窓会東京支部長

52期(昭和25年卒)

二上 達也

昨年以來公私ともにいろいろなことがありました。善悪交々来る。これも世の習いでしょう。しかし総て終ってみれば何事もなく過ぎた気がします。

母校百周年行事は立ち上がり不安感いっぱいであるに苦戦状態があったようですが、結果は成功裡に終えました。

改めて関係の皆様方の多大な御尽力に敬意を表し同時に深く感謝申し上げます。

つくづく大勢の結集力の素晴らしさを思い、伝統といえますか積み上げてきたものの大きさを知る次第です。

当支部の動きも近年は若い人達の活力が目立つようになりました。

西高・東高の同窓会との交流が生まれたり、関西支部の発足など刺激材料が多くなっています。

六月一日には東高(青雲同窓会・会長中村隆俊様)にお招きいただいて、私が会場に当てられた麻布グリーン会館まで伺いました。

当日は、卒業早々の若者達を招待したとのこと、約七・八名ほどでしたが、それでも場の雰囲気はぐっと華やいだ感じがしました。

さて本会報の制作とか大会の進行などスタッフ一同何らかの工夫を図っているつもりですが、正直なところこれといつきめ手に乏しいのが実情です。

会員皆様の情報及び励ましをお待ちします。

今後一層の御指導御鞭撻をお願いしてごあいさつといたします。

自然・函中・人生

函館中部高等学校長 高橋 國雄



はじめに

徒然なるままに、畏敬の対象たる北国の自然、また、教育文化史に大輪の花を添えた白楊魂一世紀とその後の動き、そして身辺雑感などを書かせていただきます。

躍動の季節

厳しい風雪や氷点下のシバレを越えて訪れる北国の春は、自然美に溢れております。澄んだ空気の中、山野の草木は若芽を膨らませ、花が咲き、鳥が舞い、昆虫や水生動物なども活動を始めます。

彼らは、自然の中でそれぞれの個性を持ちながら事もなげに生命を謳歌します。

その中で、人は道具や通信手段などの文明の利器を用い、醍醐味を味わっております。

万物の霊長たる人間も、他の動物のように自然に生きられたら、環境を損なうことなく、「平和で心豊かな生活を営めるものを」と北国の春から実感します。

白楊魂一世紀

「函中の百年」 それだけで感動的です。ところが昨秋は、白楊魂一世紀の大盛典の開催に当たり、函館市開基以来最高の約一千五百名が相集い、祝賀ムードで函館の街は熱気に包まれました。

講演、演奏会、記念式典、祝賀会、そして白楊画会展、校宝展など錦上絵巻にも似た数々の催しは、未だ脳裏から離れないところです。

一週間後に行われた札幌南高の同行事を凌駕して函中スピリット、即ち「白楊魂」「楊燈魂」を遺憾なく発揮できたことは無上の幸せであり、喜びを分かち合いたいと思います。

皆様の母校愛と筆舌に尽くしがたいご支援ご協力で深く感謝申し上げます。

函中その後

その後、記念誌「潮流」は読者を唸らせ、同窓会も教職員も一糸乱れぬまとまりで積年の思いを結集、生徒は文武両道で近年に

なく大活躍してくれました。特に、生徒はハンドボールで三十九年振りに全道優勝、硬式テニス、水泳とともに全国大会に駒を進め、進学では東京芸大への三名

合格をはじめ阪大、東北大、北大、札医大、早大、慶大など現役を中心に六百六十四名（昨年度比百八十二名増）が合格しております。

ハンドボールは、本年度の高体連でも四十年振りに全道制覇を果たしました。函中は現在「百一年

目の改革」を標榜して闘魂を燃やしております。

また、協賛会の最後の事業として函中百年記念会館の改築を進めており、七月十五日に完成、八年度中に解散総会を開いて事業を完結する運びであります。

有朋自遠方来

次に身辺雑感を幾つか書かせていただきます。

東京在住中のある函中のOBが時々故郷の函館を訪れます。

心を包んでくれる立派な人格者で、多忙な私も時に一緒にグルメを楽しみ、囲碁を打ち、函中のOGが経営するスナックでグラスを

交わします。人生観、文化論、自然観、教育論など時を忘れて語り、交流が続きます。

その店には医師、学者、会社重役、役人、報道機関支社長など凄い面々が集まり、カラオケや人生哲学の応酬で、ふれあいを深め、視野を拡大します。

「有り遠方より来る亦楽しからずや」 函中OB・OGは才知に富み、対話してもどこか一味違うのです。

富有の実生

私事ですが、拙宅の庭に一昨年、富有という品種の柿の種を三粒植

えました。「早く芽を出せ柿の種の願望が通り、二か月ほどで芽を出し、一年で十センチほどに育ちました。

厳寒の地であり、十一月には念入りに冬囲いをしましたが、今春菰を開いてみると幹が無残にも枯れているようで、凍死を覚悟しました。ところが、六月に何と青々とした幹や葉を茂らせ、三本とも生存していたのです。

「桃栗三年柿八年」といわれ、実るまで自分が生きられるかどうか閻魔大王に聞いてみないとわかりませんが大きな教訓でした。

種を蒔けば芽を出し、芽は環境次第で育つというのが自然の哲理です。教育の世界も同じです。

インコの仕種

わが家でセキセイインコを飼育して十三年目になります。インコは漢字で鸚・哥・音呼と書きます。

日曜日など朝寝をしているときヤーカーと起床を催促します。

しかし、話しかけると鳥頭に人鼻を擦り寄せてもご機嫌で、家族が談笑したり、かわいがるとうぐすノナメエハ、「ピーター」デス。カイワイワイ、オリコウサンなどと喋り、片開きの鳥籠から出て来て近寄って来ます。

僅か二グラムほどの頭脳しかないインコにも豊かな情感があります。愛は生きる命の母体です。

感い多き人生

少し難しい話になりますが、二ーチエは、真理について「真理の標識は権力感情の上昇のうちにある」と論じ、客観や物自体、そ

して「世界そのもの」を全面的に否定しました。

その論理と人間の独善や墮落などからニヒリズムが生まれまし

た。これは例えば、ロマン主義、感傷主義、相對主義、懷疑論、機械論、無神論、ベシミズム、そしてデカダンという諸形式で現れてきております。

ニヒリズムの克服、新しい理想の創造は、二十一世紀の未曾有の課題と思えます。

三月の卒業式で私は、才能ある卒業生に対し、私自身が感い悩んでいる新思索体系の確立と全人的人間形成の必要性を訴え、未知なる世界の扉を開くよう強く期待しました。

おわりに

人生は夢芝居や葛藤の走馬灯で彩られた時空のように感じます。

しかし、「自然の哲理」「愛」「誠実」は不易なる最良の伴侶と思えます。また、函中、それは創立以来不朽の名門校であり、教育文化の源流であります。徒然断章で書きたかったことは、この二つです。

その奥義を窮めることや先輩の皆様への輝かしい功績の総てを探ることは頗る困難ですが、全身全霊で、崇高なる哲理の忠実な僕となり、函中の牙城を守るよう最善を尽くす所存であります。

白楊ヶ丘同窓会東京支部会員の皆様におかれましては一層交流を深められ、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

どうぞご健で。

白楊ヶ丘同窓会東京支部 第19回親睦大会



65期(昭和38年卒) **菅原 大作**
副支部長

“心のオアシス東京支部を活力ある集いに”をテーマに、白楊ヶ丘同窓会東京支部の平成7年度「第19回親睦大会」が、9月15日(金)午後1時より、東京・千代田区九段北の「アルカディア市ヶ谷・私学会館」で、来賓及び同窓生およそ160人が参加して行われた。



ジャズ演奏終了後、会場を代えて、二時三十分より懇親大会に移った。

今回の特別企画は、第七三期、昭和四六年卒業の米木康志氏を中心とするジャズトリオの演奏会が行われた。
米木氏は、子どもの頃、テレビの「シャボン玉ホリデー」に出演していたクレージーキャッツの犬塚弘さんのコントラバスの演奏に心を奪われたのがきっかけで、ジャズに傾倒。母校卒業後、立教大学に進学。大学在学中から演奏活動を始め、本田竹広トリオ、北海道バンド、ネイティブ・サンなどでベース奏者として演奏活動を続けている中堅の一人。

懇親大会では、最初に開会に先立って「函館中学校校歌(同窓会歌)」を全員で声高らかに合唱、大会の雰囲気盛り上げた。司会は第七〇期・石黒秀喜氏と第七八期・岡部あさ子さんが担当した。
次いで、支部長の第五二期・二上達也氏が、「今回は、十月に函館で母校創立百周年の記念行事が行われる関係で、この時期の開催になった。また、従来の平日開催と変えて、祭日の開催を試みた。大会の開催に当たっては、今後とも皆様方の要望に沿うよう役員一同努力したい」とあいさつした。

次に、来賓として出席された横井哲郎函館市東京事務所長、鈴木進白楊ヶ丘同窓会百周年協賛会事業委員長、金石英治同窓会事務局長をそれぞれ紹介した。
来賓のうち、鈴木百周年協賛会事業委員長は、藤岡敏彦同窓会長のメッセージ「本年十一月に関西支部が発足するが、全国を網羅する同窓会組織が完成する。白楊ヶ丘同窓会を通じ、より一層結束の高まることを期待したい」を読み上げた後、百周年記念事業への寄付金の状況を説明。より一層の協力を訴えた。

この日の演奏会では、ピアノ・元岡一英氏、ドラムス・本田珠也氏のトリオで、ベニー・グットマンの「メモリーズ・オブ・ユー」など六曲を熱演。普段あまりジャズには縁がない?約一人がジャズ演奏の妙技に聞き惚れていた。

続いて、横井東京事務所長が、木戸浦隆一函館市長のメッセージ「第十九回白楊ヶ丘同窓会東京支部親睦大会のご盛会を心からお喜び申し上げます。また、皆様の母校である函館中部高等学校が今年

ジャズ演奏終了後、会場を代えて、二時三十分より懇親大会に移った。
母校は、生徒数の減少により、本年から一学年八クラスとなった。在校生は千百六十人。毎年、百五、六十人が国公立大学へ進学するが、悩みの一つは私学重視のため、優秀な生徒が集まり難くない人材を確保したいと考えているが、同窓の皆様方にもご協力をお願いしたい。
また、十月の百周年記念式典と祝賀会には多くの皆様にご参加願いたい」と述べた。





で創立百周年をお迎えになられるわけですが、全国に冠たる高等学校としてご発展されておられることとまことにご同慶にたえませぬ。日頃より、皆様には企業誘致についての情報提供や観光PRなど函館市政発展にご尽力をたまわり、厚く御礼申し上げます。私と致しましては、今後とも郷土函館を潤いのある人間性豊かな街にするよう務めてまいりますので、皆様の一層のご支援、ご指導をたまりますようお願い申し上げます。貴会の今後ますますのご発展と会員皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。す」を読み上げた後、函館での当面する課題の一つである整備新幹線の進捗状況と函館空港の拡張工事現場で発見された縄文初期の大集落遺跡について、さらに市立函館病院の移転問題、音楽と舞台公演を中心とする市民ホールの建設、大学の新設、函館湾内の緑の島への水族館の新設、などについて概要を述べた。

その後、第五四期の杉田博子さんの音頭で乾杯し、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や函館港、湯の川温泉、元町界限など、市内及び近郊の景観などをデザインしたポスターが多数貼られ、雰囲気盛り上げた。

一年振りあるいは久しぶりに顔を会わせた会員の間で



は、先輩、後輩の隔てなく会話が弾み、随所で懐かしい函館弁が聞かれ、記念写真のストロポが光るなど、会場全体が終始和やかな雰囲気包まれていた。

そして、宴が最高に盛り上がった頃、恒例の寄贈品の抽選会に移った。今回も、北海道産のジャガイモを産地より自宅へ直送する同窓会特別賞や函館市東京事務所寄贈の函館ワインのほか、洋酒やテレホンカード、雑貨類など、およそ九十点以上が用意され、抽選会が始まった。会場内では、同期の仲間に賞品が当たると周囲から大きな喚声上がるなど、一段と雰囲気盛り上がりつつあった。

大会の最後には、函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も...」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後五時過ぎ終了、散会した。



さて、「このたび、創立一〇〇周年記念誌『函中百年史・潮流』が発刊の運びになりました。編集に当りましては、創立からの一世紀を学校内外の「人・街・自然」など幅広い視点からとらえ、校風の形成と継承の軌跡を「人」を中心にまとめ、ビジュアル重視の表現方法で関係各位および後世の人に伝えるという基本方針で編集してまいりました。

ここに、百年史編集委員会の労作が完成しましたので、同窓各位に謹んでご贈呈いたします。至らぬ点についてはご容赦いただき、ご高覧賜れば幸甚に存じ上げます。

函中創立100周年記念誌 「函中百年史・潮流」について

函中創立100周年記念事業協賛会長 藤岡 敏彦



昨年の創立一〇〇周年記念式典並びに祝賀会に際しましては心温まるご祝辞や激励を賜り、改めて、お礼を申し上げます。

これまで、会員各位に協賛金募集のご協力を要請してまいりましたところ、全国から沢山の支援が寄せられ、当初の募金目標額にほぼ到達することができました。皆様方のご芳情に心より感謝とお礼を申し上げます。お蔭様で、所期の事業計画通り実施することができました。また、記念事業のメインとしての記念会館建設についても、本年の夏に竣工の予定ですので、完成の折には、協賛会総会においてご報告申し上げます。

さて、「このたび、創立一〇〇周年記念誌『函中百年史・潮流』が発刊の運びになりました。編集に当りましては、創立からの一世紀を学校内外の「人・街・自然」など幅広い視点からとらえ、校風の形成と継承の軌跡を「人」を中心にまとめ、ビジュアル重視の表現方法で関係各位および後世の人に伝えるという基本方針で編集してまいりました。

ここに、百年史編集委員会の労作が完成しましたので、同窓各位に謹んでご贈呈いたします。至らぬ点についてはご容赦いただき、ご高覧賜れば幸甚に存じ上げます。

第1回関西白楊ヶ丘同窓の集い

平成7年11月11日

関西支部事務局 55期（昭和28年卒） 三橋 晃夫



関西白楊ヶ丘同窓の集い H7.11.11 於：ホテルグランヴィア大阪

『ポプラが丘それは私の魂のふるさとである。亭々と天を摩すポプラ並木、木の間越しに見える時任牧場の赤いサイロ、南に目をうつすと砂山をはさんで宇賀の浦、遠く津軽の海に浮かぶ下北の山々、まことに一幅の泰西名画である。』

休み時間には牛の啼声をききながら牧場に寝そべって、青い空に吸い込まれていくポプラの梢を眺めていると、いつの間にか青春の夢の中に遊んでいる自分に気がつく。ポプラは土地を選ばない。どんな処にもすぐ根をおろす。そしてどこ迄でも遠慮なく伸びてゆく。浪速の地をかりそめに思った自分がすっかり根を生やし、私の人生の大半をこの地で過ごし、肝心の背だけはポプラのように亭々と伸びず、かえって無理な背伸びをしなから生きて来たことを恥ずかしく思つものである。』

今井 欣悦

この随想は、大阪教育大学名誉教授 今井欣悦氏が退官のとき出版された記念誌「白楊」に書いた一文である。御年八十八才（米寿）の今日もお元気で社会活動をされている。

白楊ヶ丘同窓の関西在住者にとつては多分、一様にもっているわがふるさと「ポプラが丘」を偲ぶ魂（こころ）であろう。ジェット時代の現代でもまだまだ遙に遠いと感じている。にもかかわらず、創立百年の伝統を誇るこの函集中ありながら関東以西には同窓の集いがなかった。過去形になってい

るのは平成七年つまり昨年、母校の創立百周年を記念してこの関西の地大阪で近畿二府四県のポプラの仲間が一堂に会し「関西白楊ヶ丘同窓の集い」を開催し、母校函中のさらなる発展を祈念し、「同窓の集い」の設立を約したからである。

関西の道産子は、古くは関西北海道クラブを中心に交流と親睦をはかっている。その中で自然発生的に各地のふるさと会も誕生している。また、同窓会では函商、函工、西高、東高は支部活動も盛んにしている。残念なことにはポプラの集いがなく、「函館をおもつ会」の毎年二月の例会で顔を合わせていた。この函館をおもつ会の設立運営や「関西北海道夏まつり」（関西北海道クラブ主催、95年発足）の運営・実行委員長が池田克彦氏（五五期）で、彼のふるさとを思う強い情熱にはいつもながら感謝している。

ポプラの集いとしては、昭和八一年ころ一四人が高島田八人を囲んで豪勢に遊んだ（二八期）、上田実先生をお招きしたとき同窓会の設立を熱望されたが実現にいたらなかった（三九期）と聞いている程度であった。昨年の函館をおもつ会の席でポプラの常連と創立百周年を記念して関西でも集まろうと言つことになって、発起人代表には大先輩今井欣悦氏（二八期）世話人に花井四郎氏（三八期）上田尚吾氏（四九期）上田実先生（子息）竹部肇氏（四九期）池田克彦氏（五五期）事務局は三橋晃夫（五五期）私が担当することにな

戦前・戦後の分布

	全日制		定時制	
	関西	全会員	関西	全会員
T13～S20	37	5,994	2	581
S21～S29	37	2,771	3	593
S30～S39	75	3,681	4	1,089
S40～S49	58	4,225	5	854
S50～S59	62	3,716	1	543
S60～H2	21	3,974	0	419
	290	24,361	15	4,083

(は1期生から48期生の数)

関西在住者府県別分布

	全日制	定時制	教職員	計
大阪	114	7	1	122
奈良	33			33
和歌山	3	1		4
京都	38	5	1	44
滋賀	13			13
兵庫	89	2	2	92
計	290	15	4	308

(計の は職員1名を全日制の兵庫県在住者でカウント)

り、間なしに名古屋から転動してきた松下俊一氏(五七期)に事務局に入っていた。幸いなるかな、百周年記念の名簿をもっていたので、一期生からチェックして生存者はすべてワープロに入力していった(楊灯会・職員も含め)。次は、意識調査をして皆さんの意向をうかがい開催と運営企画に参画していただく、つまり、アンケート調査である。

関西在住の同期生や同窓生との会合状況
同窓会の開催について賛否・開催回数/年・月・曜日・上下旬・時間帯
通信欄

案内は「関西白楊ヶ丘同窓の集い」について母校函中の創立百周年を記念して集うことを主旨とした。この調査は関西北海道クラブの協力により、「関西北海道夏まつり九五」の案内(七ノ二一)に

同封発送させていただいた。ここでは、事務局の足と代表・世話人には通信で事後承諾を得ながらすすめた。結果は三〇八通送付して

(表参照)
希望する方 七一名
希望しない方 二五名
戻り 二九名
回収数 一二五枚(四二%)
未回収 一八三名(五九%)
会合について一八名の方から函

館、東京や西日本の同期の方と或いは東京支部会に参加したことがあると回答が寄せられた。
・年一回希望が五一名
・二回希望が二名
・二丁三年に一回が二名
・記入数 五五名

通信欄には、長年待望していた、嬉しい是非開催して欲しい、同窓生が多いことに驚いた、心強くおもった、学区制で卒業してないが同年代の方もたくさんられる

と参加しやすいのですが、大阪で十六年になるが北海道の方にあつたことがない、育児で無理かも、など記入されていた。

不参加の方では、高齢のため療養中の方二名、阪神大震災に遭遇して函館へ転宅された方一名、転勤された方二名、この年に他界された方二名(合掌)
百周年記念総会・同期会にいく同期会があるから不要という意見も

未回収は地区外に転動された方が在住者の無回答と推測する。
九月二日に世話人会を開催し、資料として
アンケートの集計
関西在住者の名簿
期別分布および府県別・地区別在住分布

等を参考に開催について検討した。その結果敢えて同窓会とうたわず、母校のさらなる発展を祈念して校歌や応援歌に青春を謳歌し、函館弁に花を咲かせ気楽な会とするので、「関西白楊ヶ丘同窓の集い」として開催することに衆議一決。日時はアンケート結果をもとに十一月十一日(土)一八時と決定、案内状の修正、採算は五五名の参加が必要とみた対応と今後の運営方法について打ち合わせた。

早速、九月十日に同窓会長あて集いの開催案内状とご協力の依頼状を送付し、参加希望者を中心に往復はがきにアンケートのまとめも記載して約八〇名の方に発送した。事務局の判断で同期の方の名簿に呼び掛けを依頼して封書で送

つた方もあります。締切り後は事務局で分担して電話で未返答者や呼び掛けの依頼でコミュニケーションもはかった。四七名の方から出席の返事をいただき、ほぼ一〇〇%にちかい回答が得られた。

十一月十一日(土)がきた。会場は近畿二府四県(京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫)の中心大阪駅ホテルグランドヴィア大阪で開催、一八時の開宴を待った。早い方で一時間前から三々五々ロビーにつめかけておられた。事務局は二時間前から設営に大わらわであった。受付に娘も手伝わせ、百周年記念のテレフォンカードとTシャツ白楊魂を並べ、宴会場にはビデオの設営(白楊魂一世記、函中一世記の歩み、池田氏提供の祝典・祝賀・新校舎の風景)、写真展示(四九期・上田氏写)、各テーブルには期順に名札と袋詰め(白楊だより第二三号、函中 教室のしおり、北海道新聞の記念記事、プログラム・校歌・応援歌、出席者名簿)を配し、VTRの準備(木村雅行氏六〇期)、池田氏揮毫の集いの横吊り看板の掲示、なにぶん経費もなくすべて手作りである。

その間ロビーでは旧知の挨拶の声、あるいは一人静かに座る方などなど。一七時半の受付開始でやつと白楊の仲間を確認できた。開場には函中校歌が流されビデオも写しだされた。

定刻一八時、司会 松下氏により開宴した。発起人を代表して今井欣悦氏から挨拶があり、世話人と事務局の紹介をうけた。引き続き、藤岡敏彦氏同窓会長の挨拶、

高橋國雄校長先生の祝辞(鈴木進先生五六期 代読)、事務局報告(三橋)、祝電披露(東京・札幌・宮城・函館の各支部発)、乾杯(花井氏)のあと別室で記念写真を写して食事、歓談に入った。宴もたけなわで自己紹介が始まり時間は延々、やつと青春の謳歌だ、上田氏のリードで函館中学校校歌を皮切りに木村氏先導により函館中部高等学校校歌が、竹部氏を団長にアインツパイで応援歌に声高鳴らせた。次いで、池田氏の司会で今後の問題として関西支部の設立、会合名は世話人会ほかで決めることで全員一致の了解をいただき、京都大学を名誉教授でこの春退官された手塚泰彦氏(五二期)の万歳三唱、楊灯会を代表して星井昭氏(四九期)の閉会の辞で集いは予定を超過して大盛會裡に無事終了し、再会を約して散会した。

今井代表は、昭和八年の高島田を語りだしに、自由を体得できたあの函中母校の精神をおもいかたり、明日の生活の活性化に役立てるのも意義がある。本会のますますの発展を心から願うと喜びをからだ一杯に表した。

藤岡同窓会長は、平成二年に笹島吉平前会長から関西支部の結成を宿題に引き継ぎ、気にしていた。集いの話しを聞いたとき、大変嬉しく思ったとお喜びの祝辞をいただいた。創立記念や同窓会館の建設計画などにもふれられた。来年も大阪に来る予定をしている、多数の参加を感謝すると結ばれた。

高橋校長先生からは、「白楊魂一世記」という大きな節目に名門

函中の同志が相集い、強い絆を結ぶことは、母校の教職員や後輩の生徒にとって大きな喜びである。真理の探求やスポーツ活動に魂を燃焼させた青春時代を語り明かしていただければ幸いと丁寧な祝辞を戴いた。(函館支部長代理鈴木先生代読)

また、この集いに祝電を寄せられた東京支部長、札幌支部長、宮城支部長、函館支部長にこの紙面をかりてお礼申し上げます。

自己紹介は池田氏の軽妙な司会に、皆さんの声も乗りよく、小中学校名を紹介始めにすると隣組だより身近に感じ、出席者名簿で同じ町に住んでいることに親しみも増す。その昔に思いを馳せる方、かの啄木の砂山の砂にはらばいをHに書きかえて残した方、世界の発明王(液体洗剤、世界の香

水づくり)、列席の飲み仲間三人で「高度に生きる酒」なる本を著し民族博物館酒の館におちついた?方、女房は高女出身と鼻たかだかの楊灯会の方、転勤を重ねて十数箇所やつと関西に落ちついたけれどまだ?、年と共に人恋しくなってきたとくに八コダテのひとがと女性の声、日赤の献血を呼びかける方、京都の植物園の近くで整形外科を開業している方(高齢化社会もし京にお越しの節はご安心を、コロバ又先の杖として六二期浦出氏を特に紹介します)同期の夫婦と奥さんを自慢して旧制の先輩に紹介した方 等々 (お名前は省略します) 一様に皆さんが、まさかの集いに列席できた喜びを表してくださり世話人一同感激した。

のもと函館支部長代理としてご出席の鈴木先生を囲み、二九期大正一五年卒を初めとする旧制中学入學の方が一七人と、五五期から七三期昭和四六年卒までの新制高校入學の方が二八人の総数四七人が一堂に会した。遠くは和歌山の南端の町すさみから駆けつけてくださったとどんじり会の宮本氏(五一期)。最年少の西島徹氏(七三期)は六四期から八八期はまかせてください、昭和二二年の甲子園出場いらい弱体化した野球部を道大会に引張っていった力はまだまだもっているという心強いご発言に今後の拡大を期待した。また、あの阪神大震災に被災されたにもかかわらず出席された五人の方、出席できなかった方の早急の復旧とご健勝を祈願し、皆様のおもいを胸に「永久の集い」を目指して役

員一同創立一〇一年の第一歩を歩み始めます。最後に、母校函中と同窓会のさらなる発展と、二上会長をはじめとする東京支部の皆様のご今後のご指導とご発展を祈念いたします。また、四十年間音信不通だった私を励まし応援してくれた二八会(五五期)の奈良敏夫会長 二八

代校長野田義成氏(現遺愛校長)大阪義道事務局長をはじめとする同期の仲間と、この春退官された同窓会事務局の金石英治先生(五六期)のご援助に感謝して筆をおきます。今後の活動の課題は組織化と流動する若い世代の関心をどう呼び起こすかであろう。

白楊ヶ丘同窓会札幌支部大会に出席して

東京支部・副支部長

54期(昭和27年卒) 杉田 博子

梅雨のない北海道といわれるに、ふさわしくカラリと晴れた六月二十二日、南五条のセントラルパークに於いて、白楊ヶ丘同窓会札幌支部大会が行われ、二上支部長の代理で出席しました。六十名近い出席者で五時三十分より始まった総会では、物故者十三名に対する黙禱に始まり、高島巖支部長の御挨拶に続いて、事業報告会計報告等で総会は終わりました。若い方々の住所移動が多く八十一期からの、支部名簿が出来ないと悩みを話されていました。どこの支部も若い期をまとめるのは、大変なことです。懇親会では、高橋国雄校長先生が、中部高校も文武両道の精神にのっとりスポーツも盛んですが今年例年

より一六〇名も多い進学数だったとお話されています。心配していた同窓会館も百周年記念会館として、五〇〇平方米近い物が、七月に完成するという事です。母校の百周年の過程で現在までに受け継がれた貴重な寄託物や所蔵資料等を「校宝」と呼び、百周年記念事業の一つとして、集約、整理保持する「校宝調査委員会」が発足しました。二十五点の絵画の寄付がありました。これを契機に、母校の歴史を物語る品物や写真等があったらお知らせ下さい。とのことでした。出席者最長老の厨川さんの乾杯の音頭から松本宏平さん(日本奇術協会)のすばらしいマジックショー、恒例の甲斐熊五郎さんの歌謡ショーと楽しいひとときを過ごし、出席者で一番若い七〇期の佐藤繁男さんの万歳三唱で、閉会しました。往きの飛行機では、雲ひとつない函館上空から故郷を目の当りにして感慨ひとしほでした。

博多五稜会

63期(昭和36年卒)

中谷 健司

七月に入り梅雨明け前のどんよりとした天気が続いています。博多の街は伝統の勇壮な男の祭り祇園山笠の飾り山笠が街のあちこちに飾られて、夏本番の足音がそこまで近づいて来ています。

福岡に来て早八年経ち、九州在住が都合二十年を経過しました。この町にも私と同様函館近辺で生まれ、生活して転勤その他の関係で此処に住んでいる人が相当居ります。

そう言う故郷を懐かしむ人達の集まりが、平成四年四月にJALの福岡・函館線の開通に因み函館にいわれを持つ者の会として「函館五稜会」が設立され今年で五年目になります。第三回の時に丁度「函中」の同窓会名簿が出来たときに私にも招待状が来ました。なので早速出席してみました。第三回総会及び懇親会は平成

六年十月十四日に博多城山ホテルにて開催され当日は函館市から木戸浦市長始め岩船商工観光部長・旅館組合会長等六名程の方が来られ、朝とれ立てのイカソーメンや函館ワイン等のお土産を持参され一〇〇名程の出席者は懐かしい味に舌鼓を打ち故郷の話に花を咲かせました。最後に抽選会が有り一等は日本航空(株)から福岡・函館線のペアの往復券等素晴らしい景品が出、来年の再会を約束して散会致しました。

同期の仲間から東京支部同窓会の案内状が郵送されて来るたびに都合が悪く中々出席できずにおりますが、会報については楽しく読ませて貰っています。有難うございます。

昨年は大阪支部も開催されたという事で、地方夫々にいろいろな会が出来て同窓の仲間が集う機会があるのはとても良い事だと思ひ、博多にも「五稜会」有り紹介させてもらいました。

カラスの教え

34期(昭和7年卒)
伏見 滋夫

私が中学の四年生のことだ。カラスこと宮崎先生が担任だった。中学生も三年生位になりますと、弁当は三時間目くらいまでに食べてしまい、昼飯の時はパンを買って来てこまかしてしまっただけです。

この時も四年生仲間五、六人と昼飯の時間は失礼して、そばの時間牧場に行き、牛乳をのみながらパンを食べて我々だけの昼食時間を取り、帰りは文化村通りを通って行くのですが、この道路沿いに道立の女学校の音楽の先生の家があり、うまさうな葡萄がたわわになっておりました。

仲間の中にいたづらなものがいて、その納屋の屋根に昇り葡萄を三丁四房とって来て、教室で皆んなに配りました。

葡萄をたべた仲間の中にあと始末の悪いのがいて、皮をそのまま床に投げておいたものがあり、当日の掃除当番があと始末をしていたところ、見回って来た担任のクラスに見つかってしまい、全部白状してしまつたのです。翌日の昼休みに小生と浜谷君(故人)の二人が博物教室に呼ばれました。当時浜谷君は級長で、小生も野球部のキャプテンで成績も優秀の方でした。先生に「君等はこの時に、

いたづらをやめさせるべきなのに、監視役になつたとは何事だ」とこんなこと約一時間説教されました。それでその学期は二人共「操行」は甲より乙になると思つて覚悟しておりましたら、以前の通り甲でした。昔の先生は普段はきびしくおしえましたが、なかなか情のある教育を心掛けていたのです。この時つくづく先生に感謝したものです。青春時代の一ページの出来事です。

青函連絡船の思い出

36期(昭和9年卒)
三国 栄徳

明治四十一年開業以来、八十年の歴史を持つ青函連絡船は、昭和六十三年三月十三日を以て其の航跡に終止符を打ち、昭和三十九年着工以来四半世紀で約七千億円の巨費を投じた世界最長(長さ五三・八五Km)の青函トンネルを一番列車が走り抜けて津軽海峡の主役は交代した。

故郷函館の顔でもある青函連絡船の廃止には寂寥感と惜別を禁じ得ない小生には、終世忘れ得ぬ数多くの鮮烈な思い出がある。およそ六十年前の昭和十年十一月二十八日入隊のため十七時三十分発の翔鳳丸に乗船し、親族、級友らの歓呼の聲に送られて、五色のテープを握りしめ萬感胸に秘めて哀愁のドラの音と共に故郷に別れを告げて吹雪の津軽海峡に出航した。



十五号により洞爺丸が函館出航直後湾内で転覆沈没し死者千五百五十五人、生存者百五十九人という悲惨な大事故があった。

青函連絡船に開業以来乗船された一億六千万の人々は喜怒哀楽愛憎各人各様の感情を胸に刻み悲喜交々の思い出を積んで津軽海峡を渡られた事と思う。消え去るものには未練が残る。発着時のポーポーと港にこだまする汽笛、夕焼に染まる函館山、夜景に明滅する市街を眺め乍ら連絡船が巴湾を出てゆく港の風情、郷愁の思い出はつきない。淋しさややるせない懐旧の念を抱き乍ら長い間お世話になつた連絡船よ有難うと心から感謝する。

昭和四十年代函館空港開港と共に連絡船の利用客は激減し青函トンネル開通で連絡船は廃止された。嘗て北洋漁業の基地として全盛を誇つた函館も終戦以来衰弱の一途を辿り、造船業界で発展した函館ドックも不況産業として存立すら危うい現状で函館の前途は暗影が漂う。時代の流れに逆らう事はできないが、今や観光都市としての復興に期待するより方途のない故郷の発展のために青函トンネ

咳く化石

39期(昭和12年卒)
河村 泰平

ル開通が起爆剤となり経済効果をあげ繁栄されることを心から念願しております。

石造りの門柱前に佇み瞑目すると若い女教師とお手々繋いで続々雀の学校の無垢の男女児童達が嬉々と門内に吸込まれて行く。目を開くと朽ちかけた表門は固く閉じられ奥は松柏が伸びぼうけ、ここうとうと午後の立つた風が枝々に鳴って昼尚暗い林間。八テと再瞑目すると瀟洒な白亜の館の建つ日当たりの良い芝生の暖かい起伏のある丘に、林間の樹上に萱茸や椰子の葉茸きの土人の高床の家々は誰が設計したのか、表門周囲は手入れされた芝の高い土堤塀により囲まれ、管理人夫婦の小屋もある沢山の針葉樹が黒の森を形成している。再び開眼すると殆ど手入れの行き届かぬ雑木の奥は狐狸が住みつき、歳月の肩越しに有形の邸は腐葉土の下に沈下したのか。生来ひ弱な兄で函病を往つたり来たり、松風町の家柳医師が主治医だったが高砂小生徒となり親の肝煎りで函館教育会夏季林間学校に三週間入れられて、朝の七時には大門前電停からボギー車に乗り、谷川に架設した橋のある鮫川電停(湯の川温泉)で下車。どれもこれも函館各小学校の名うての

虚弱児童達は夏物白半袖シャツに半ズボン、胸元に緑ラシヤの円座の上に金の桜章を取り付けて三々伍々、三つの屋外温泉プールと大内湯のある高樓の千人風呂の前を徒歩で通り、快哉して提供された相馬財団の湯の川別荘地の松林内広場特設大講堂に、二五〇名の机とテッキキチエアーが待つて居る林間学校に赴くのであり、散敷ける松葉は茶褐色に枯れて自然のクツシヨン、揃いの昼食付の生活。充分冷えた朝露に分泌した濃い赤松の樹液がスガスガしくて二十米も高い松柏の梢に名残の夜風が浜風が、こうこうと鳴つて。

責任者の金子平吉校長は本部幕舎で、各校選出の先生方や看護婦もいた。林を通して根崎の海も近いからオドロオドロと波の音。海峡に浮かぶ白い雲が泰正名画の如く色変わりする。鮭か鱒の照り焼きよりサツマ汁のゴツタ煮やカツカレーかハヤシかチキンライス。だからコーヒーにパンの数物は甘く煮含めた豆が練込まれたパンで松樹の香にミックスしたコーヒーの濃い香が全児童らと先生方の嗅覚を悩ませる！昼食後は別天幕の青い寝ゴザに転がり眠くないのに『寝よ』と言われ狸寝入りさせられる。午睡後は全員浜へ行き海水浴。三時各自紙袋入りのおやつ駄菓子を買って体一杯オゾン吸って五時鮫川から電車の人として家の夕食まで帰宅。お昼は何だったの。オヤツは何？と母に報告。

傍らのお手伝いさんに挨拶して。

大正のプチ・ブルジョアの子弟達だった者の一米程の視点からの以上の『夏の思い出』は、松とコーヒーのミックスした香りと共に、映しとして顕現し再臨もするが、灰白色の脳内メモリに感光された七〇年前の映像は世紀を経ても、何時、消え果てるのか。

石造りの門柱と扉のみ、松樹の林に対して耳を傾ける。大層高樓の觀光湯の町は良い。何も彼もオツかぶせたアスファルトのジャングル。それもよがる。でも僕は大き一桁に生を享け昭和一桁に育つたものとしての、これはグリーンプスなのでありましようか。

我が師たちのこぼれ話

40期（昭和13年卒）

相馬 正樹

私が四年生のときの担任は松倉恒夫先生であった。北大の物理学教室の助手から新任で来られて間もない頃であったから、多分二十五才ぐらいだったと思う。数年で函中を去られ、戦後は横浜市立大学の教授をされてこの大学の学長を二期勤めて定年退職された。

その頃神奈川在住の同期生十人ぐらい集まって先生を囲む会を開いて、その席上で先生から聞いたこぼれ話を紹介しよう。

その頃の中学の先生は、高等師範卒業生が主流派で、それ以外は外野として扱われ、北大の卒業生

でも校長になる望みは全くなかった。その中でも、英語、数学、国漢文、歴史、公民以外の教科の先生は第二線級で、教員室の雑談の仲間にも入れてもらえなかった。うだ。したがって、高等師範の卒業生が赴任してくると、教員全員が棧橋まで出迎えに行つた程大袈裟な歓迎をうけたらしい。

先生の当時の初任給は一〇〇円だったというから、相当の高給取りに属していた。当時国鉄の職員が停年で辞める頃にやと一〇〇円程度だから、中学の先生は、女中を使える身分であったと言われていた。もつとも、当時の女中の月給は三食付きで五円ぐらいだったから、五〇円あれば結婚生活ができる時代では、女中の二人ぐらいは雇えることになる筈だが、他から見ても先生方がそんな優雅な暮らしをしているようには見えなかった。

しかし、独身の先生は余裕があるので、生徒を監督する身でありながら紅灯の巷にも関心をもち、ある先生などは「カフェー武蔵野」という最高級のキャバレーに入りにしていたという。ある日店で酩酊してあばれ、ガラス戸を壊して一晩警察のお世話になることになった。翌朝酔いがさめて驚いた。中学の先生が留置所に泊められたと言つことが分かったら、翌日の新聞の三面記事を賑わすことは必定。そうなら一大事、免職になるかも知れないと内心穏やかではなかった。

はなかった。

帰り支度をしていると、警官が「先生おやすみになれましたか。時間でですから学校までお送りします」と言つて出口に案内し、用意した車で学校まで送ってくれた。どつしたことがと不審に思つていたら、車を降りる時に渡してくれたのが身分証明書であった。それで謎は解けた。夕べ暴れているうちにこれがボケットから落ちて身分がバレてしまつていたのだ。警察も粋な計らいをしてくれるものだ、手を合わせて車を見送つたという。

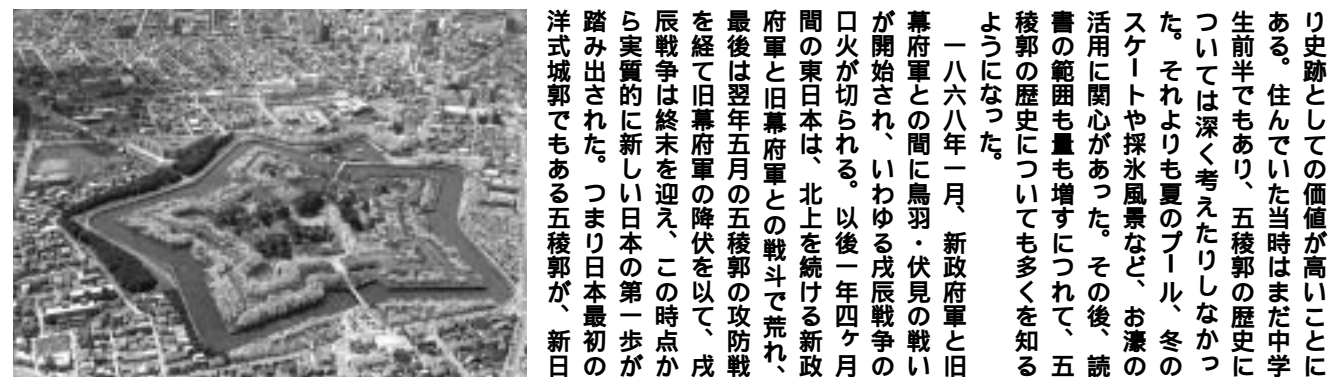
思い出の場所・五稜郭

42期（昭和15年卒）

村山 正郎

私の生まれは札幌であるが、昭和十年九月父の仕事の関係で函館に一家が移り、私は函中一年生となった。最初の家は、五稜郭それも現在の五稜郭タワーの向かつて右隣りで、今も健在である。三年位経つて松蔭町に移り、昭和二十一年以後は東京に永住という次第となった。

このように五稜郭に住んだ期間は短い、五稜郭の風物は消えぬ印象として、心に刻み込まれている。年に何度かは北海道に行くが、函館には出来るだけ立ち寄ることにしている。目的は五稜郭を訪ねるためである。



本誕生の舞台となったわけであ

このような歴史とそれにまつわる諸々の史実を胸に描きながら歩く星型土堤の五稜郭は、私にとっては、萬感去来する思い出の場所なのである。

最後に、私は史跡五稜郭がこれから先も俗っぽくならないことを願うや切である。

ふるさと函館

42期(昭和15年卒) 田沼 静一

函館がロマンチックな街だといつても反対する人は少ないだろう。一つは街の地形・風光で、もう一つは幕末頃の五稜郭から函館山麓にかけての戦争の歴史である。血生臭い戦いをロマンチス



ムに繰り入れるなど不謹慎だが、時を至っているし、函館八幡宮の境内の小暗い間に立つ碧血碑(函館戦争の死者を弔った碑、子供の頃、近所でよく遊んだ)を訪れると即物的な思いよりは感傷的な思いにとられる。

函館の風光といえば函館山頂から眺めた夜景という誰も異論のない美景だが、これが喧伝されるようになったのはここ二〇年位の間だろつか。戦前は函館山要塞にのぼることはできなかったし、夜の町も今のように明るくはなかった。私の知っている函館は昭和九年の函館大火の数年前から、大火後の戦争までの期間。大火のまえは、とくに山の手の方は北洋漁業の基地としての賑わいは他都市に比肩するものがなかったのではな

かろうか。英国向けの鮭缶などは貧しかった日本的重要給出品の一つであったときいている。ひっそりした街ではなく、出船入船の多い繁栄した街であった。私は坂の上からそのような多くの船々を特別の景色としてではなくふつうに眺めていた

し、金森倉庫の付近にゆくと数多くの英字新聞が梱包材料でもあったろうか歴大な量落ちていた。小学生の私は植物採集のように外国の新聞の読めない題字のところを収集していた。私の家は大火前は相生町、大火後は曙町にあった。さきの碧血碑もそうだが、啄木の歌にある青柳町とか住吉町は毎日の遊び場であったし、一寸南に足をのばすと立待岬があり、北に伸ばすと、エキゾチックな教会群やさらには英国領事館、中華領事館、ロシア領事館があり、さらに遠くへゆくと外人墓地があった。旧制高校で仙台に遊学し、また東北大に就職してからも夏冬の休暇には必ず長目の帰省をとって心ゆくまで散歩したものである。

函館はまた津軽海峡が生物学上多くの種を区別するプラキストンラインと呼ばれるとあり、植物や海藻の種類が甚だ多彩で、郊外を探索するのが楽しみであった。私の場合、友人は多くなく、路上散歩と郊外や海辺の探索に楽しみを見出していた少年であったが、北大から金属材料技術研究所に転じ、東洋大学教授で三年前に亡くなった渡辺亮治君とは妙に気が合って終生の友であった。また植物採集の同伴をさせてもらった博物の柳田十九男先生も忘れることのできない先生である。

とここで函館は海峽側の宇賀の浦と巴港によつてはさまれた細い砂州から出来ている。その一番細

い部分は大門のあたりでわずかに二軒くらいの幅であろうか。これは都市としての脆弱さを感じさせる。自然が相手だから仕方がないが、この幅が二倍あったらよかつたのと思う。もう一つの問題は大して広くない渡島半島の先端に位置しているため、後背地がないことである。堅固な産業の育たない所以である。北洋漁業の根拠地であることを失って以来、函館は観光で生きる事しかなかったのは残念である。三〇万都市で函館のような街は他にない。佳人といえるかもしれない。そのような所を故郷にもつた私達は故郷の美しさをロマンチズムの観点から受け取るしかないのかもしれない。

招魂社 44期(昭和17年卒) 中嶋 恭一

ラッパの音で目が醒めた。招魂社に向かう兵隊の列である。幼児の僕は店の出窓に縋って、その勇壮な譜調に見とれた。 午后には、朝、兵隊の登って行った長い坂の両側に、ぎっしり出店が並ぶ。小学生の僕は級友と連れ立って、参詣に坂を登る。その時この出店が楽しかった。大したものもなかったが、竹竿とカンバスで造ったその出店が、隙間もない位に続いて、次々売物の変って行く変化が、萬華鏡を見る様に楽し

出店は、坂の下の電車道まで続いているばかりでなく、招魂社から公園に向かう裁判所跡下の道の両側も埋めつくした。出店と出店の間の僅かな隙間には、芸人がいたり、ひっそりと占師が座っていたりした。そして頭上は満開の桜である。

人々は肩でぶつかり合い、背をつつき合って、行き又来り、知人に会うとその雑踏の中でお辞儀をし合う。境内には所狭しと、見世物小屋が立った。犬猿の芸、口クロ首、お化け屋敷、芝居、サーカス、手品、高野山のお札売りから、ガマの油まで、咲き乱れる花の下で、何と賑やかだったことか。 この坂を、中学生になった僕達は、隊列を組んで登ることになった。戦争がはじまっていたので、皆ゲートルを巻いて行進した。出店はめっきり減って、片側にかかるうじて列をなす程度である。

それでも夜は、思わぬ景観に出会うことがある。南京陥落のパレードで、皆手と手に提灯をかざしている。それを境内から見下ろすと、まるで火の河である。と言うより、僕にはそれが一腹の筋子の様に見えた。

後年、出店は殆どなくなってきた。それが僕には悲しかった。戦後は、祭りそのものがあるのかないのか。年々歳々相似た花の下で、歳々年々人の世は移ろいゆくようである。

遺愛女学校雑感

46期(昭和19年卒)

渡辺 保二

一昨年卒業五〇周年の集いで函館に赴いたが、夜のパーティまでの間、地元の幹事さんの計らいで市内の観光コースを貸切バスで回った。観光名所は今まで何度か立ち寄ったが、遺愛女学校(現遺愛女子高校)の中に入ったのは初めてである。我々の函中時代は女学校はすべて禁断の園といはれ男子禁制の庭中でを覗くだけで鉄拳が飛び、今では想像もつかぬ厳しい時代であった。初めて見るキャンパスは色とりどりの樹木に美しく映えて想像以上の素晴らしさであった。私の家は当時みどり町通りに在り、幸いなことに二階の窓から遺愛の校庭が良く見えて時折ブルマー姿の女学生が体操をしているのを眺めながら胸を踊らせたこともあった。又家の近くに遺愛の生徒が数人居り、毎朝顔を合わせると心に心がはずんだ。何しろ女学生との会話は禁句になっていた時代である。たまたま同期の笠島秀夫君の御母堂が遺愛の教頭で又書道の先生でおられたので、拙筆の私は笠島君の家で遺愛の生徒と一緒に習字を習ったことがあったが今では懐かしい思い出として心に残っている。

遺愛女学校は美しい白壁からホワイトハウスと呼ばれ函館出身の

文学者亀井勝一郎氏は寒川の渡し、立待岬の満月、旧橋樑の落日、

教会堂のポプラ並木、臥牛山の山頂、五稜郭の夏草、修道院の馬鈴薯の花と並んでこのホワイトハウスの緑影を「函館八景」に挙げてゐる。当時の函中生はミッシヨンスクールの女学生に對し、あこがれの象徴であったと思う。戦前はミッシヨンスクールといえは全国で長崎の活水学院、東京の青山学院、そして函館の遺愛女学校の三つと聞いている。年輩の方ならご存知と思うが作家の石坂洋次郎氏の小説「若い人」は、遺愛女学校をモデルにしたもので、内容は青年教師と女学生、そして女性教師の三人がくりひろげる学園青春小説で後に何度か映画になったこともある。

一歩校舎の中に入ると手作りのパイプオルガン、大きなシャンデリア、心が落ちつくチャペルが目につき、好環境の中で勉強が出来る現在の女子学生は誠に幸せに思えます。

さて我々大正二桁生まれは青春時代を日本の敗戦、戦後の復興に尽くし、又多くの学友を戦争で失い、幸に生を得た思い出深い年代であります。特に函中時代は国家主義や軍部の圧力により全く自由のない灰色の青春を送ったが、身近に遺愛というミッシヨンスクールが存在していることに少なからず感動を覚え、心の安らぎになったことは確かである。

函館を日本一のつつじの名所にしたい

53期(昭和26年卒)

佐々木順一

古里は、遠くにありて想うものではない。時々訪れては、心の中心に存在しない両親や、やさしかった伯母たちの確認をしながら、五稜郭公園をさまよってみたいものです。

ところが、私達が小学校一年から六年まで運動会を秋に開催した五稜郭公園の思い出の桜の木が、

朽ちていたのには、驚きであった。もう十年も前になるだろうか。その後、あの哀れな老木の割れた幹や、たれさがった手入れされていない情景はどうなったのである。桜の樹は、手入れが大切だといひます。市に予算がなかったのでしょうか。

国の名所は、自然がつくってくりあげたものがあります。

函館山の夜景の美しさは、私達のお国自慢のひとつではありませんが、そのなりたちは、神の力によるところが大きいです。明治になつて、人口が増加するようになった函館において、ハリスト教会とか、公会堂といった先祖の手になる建造物が文化遺産として残っています。その後住民の手によって

きてゆくべきでしょう。そのための古里創生は、矢張り住民のマンパワーによるしかないと考えます。

函館と大沼公園、この二つで二重の周遊現象をつくり出すことです。七月八月だけでなく、六月から観光客をさそう計画で、函館山を、恵山つつじで埋めつくしてはどうでしょうか。桜は弘前にとられてしまいました。つつじや五月は、ひと月以上も花を楽しませてくれます。三十万人の市民が、つつじの「一人一本植樹運動」を開いては如何でしょうか。函館を離れている私達は、キャンペーン期間中に参加のため里帰りするか、献金でこたえるでしょうか。赤、ピンク、黄色等々全山がつつじに燃える函館山を想ってみてください。子孫に遺せるひとつのアイデアではありませんか。臥牛山すべてが、つつじに燃えれば、日本一です。

若さ実感記

54期(昭和27年卒)

佐藤 正郎

これは数年前のことである。

テルコさんの住いまでわが家から自転車五分。お嬢さんを嫁がせての一人住いである。お互い近くにいてのを知ったのは同期会で、その頃はお嬢さんと二人暮らしであった。そのお嬢さんが結婚したと聞き、無聊を慰めようと思



函館は産業がありませんから、観光地として生

我が故郷——函館・街・人・思い出——

随想

い立ったのである。

夏。空が高くやたらに暑い日曜日であった。ポロシャツと素足にサンダルで颯爽とペダルを踏む。風が頬に涼しかった。

自転車を止め階段を軽やかにのぼる。プザーが鳴ると「ハイ」と声かけてドアが開く。あれ、しばらく余わないうちに少し老けた

かな、光陰矢の如しだからな……と思ったとたん「どなたさまですか」と『よそ行き』の声。あっ母親だと気付いた瞬間、舞い上がってしまったのである。

「え……函館のあのう……中部の同期生のサトウで……あのう……テルコさんはお元気で……」



ルコは出掛けております。ナンです。ねえ、お休みのたびに出掛けるんですよ。いったいどこへ行くんです。それより早く態勢をたて直さなくては。深呼吸……」

帰路、汗をふきとばす風の中で考えた。「母親が来ているとは知らなかった。母親注意シールを貼ってもらいたいもんだ。それにしてもよく似ていた。親子と似てあれほど似ることはない。ところで何故うるたえたんだろう。男とはいくつになっても母親を煙たい存在と認識する生物なのか。いやそうじゃない。これはオレはまだ若いことの証左であるに違いない……」

石狩の植物画

69期(昭和42年卒)
安藤 牧子

母なる石狩川に因って豊かな自然がもたらされた、ここ石狩にも近年開発の波が押し寄せてきています。気がつかない間に周りの自然も少しずつ変化してしまいました。

十八年前、私がこの地に移り住んだ頃、春には近くの防風林に一面、真白にオオバナノエンレイソウが咲いていました。ところがいつの頃からか、その数がめっきり減ってきています。周りの人々もそのことに気づき始め、自然を大切にしよう、という取り組みが、あちらこちらで聞かれるようになってきました。

私は六年前、ふとしたきっかけから植物画を描き始めました。今まで何気なく見過ごしていた道端の草花さえ、目を凝らすとその精緻で美しい色と形に驚かされます。幸いなことに私達の身の回りには、まだまだ美しい豊かな自然が残されています。石狩浜にはさまざまな海浜植物、マクランベツ湿原の水芭蕉、五の沢、八の沢の森、そして街を縦横に走る防風林にも四季折々、いろいろな花や樹木がその美しい姿で私達の心を和ませてくれます。

私達も植物たちとともに自然の一員であることを心に留め、自然を大切にしていきたいものです。そして私はこれからも周りの植物たちを見つめ、描いてゆきたいと思っています。



国立科学博物館第九回植物画コンクール
文部大臣賞受賞作品 ヤマゴボウの図

第40期・よんまる会

(昭和13年卒)
今井 清記

函中百周年祝賀会の前日、平成七年十月十三日夕、湯の川旅館一の松でわが第40期よんまる会全国大会が開催された。出席者は三十八



名に及び、大広間で記念撮影の後開宴、中には卒業以来初めて顔を合わせた人もいて、懇親が深くまで続いた。われわれが在学した昭和八年から十三年は、上海事変から日華事変へ突入した時代で、十六年には太平洋戦争が勃発している。このため、多くの学友が、兵役につき、戦死した友や戦後の逝去者も多い中、同期会に出席できる幸せをかみしめた次第であった。

今回は、地元函館、札幌、福岡、京都から、東京地区からは相馬正樹幹事ほか八名が出席した。このような大勢が集まることのできたのは、函館幹事の諸兄が、会報、同期会の文集、近況報告などを日頃から熱心に連絡してくれている結果とと思う。

翌日の函中百周年祝賀会は記念誌「潮流」に詳しく当日の盛会ぶりが載っている。出席者は千四百名で、さしもの函館市民体育館会場もテーブルと椅子で埋まってしまった。良く計画されたプログラム通り会が進む中、乾杯の首頭をとられた第24期の先輩の啄木の歌の朗読に感心し、「白楊魂 一世」ビデオ上映を懐

かしく見た。われわれが教えを受けた先生は萩原獅郎先生のみがご出席で同期の井上勲君がわれわれのテーブルにおつれしてご挨拶ができた。九十年の時は高島小太郎先生が、宮崎宗孝先生のメッセージを読まれたのを思い出す。

同期会と祝賀会の合間をみて私は市電に乗り十字街で降りて旧丸井の坂を上がって五島軒の前の通りを過ぎ、しばしばテレビで放映されている大三坂を見て歩いた。途中、資料館を見に行くという同期の森孝平君に声をかけられた。

戦前からあったカール・レイモンさんの店は今はドイツ風に改造され、ソーセージを食べさせる観光名所のひとつになっている。

函館の賑いの中心は五稜郭以北に移ってしまったが、このかわいは静かな住みよい町に見つけられた。

第42期・高楊会

(昭和15年卒)
菅原 芳夫記

暇を閉じると校庭の廻りにポプラの樹が聳え立ち、千代ヶ岱電停から歩いて来て校門を入ると左手に御神影の祠、右手に古い校舎があったことが今は遠く幻影のように浮かんで来ます。

函中卒業後既に半世紀以上経っているが、さすが歳月の永さには色々な消長があったように思う。高楊会会員二二九名中、物故者九六名(戦死者二七名、逝去者六九

名)、消息不明二六名、合計二二二名、現会員は一七名となっております。

その中窓会にはいつも40〜50名元気な顔を見せています。私達の年代で最も衝撃的事件は何と云っても支那事変とそれに続く太平洋戦争でしょう。そのため我々の運命を大きく変えたと言つてよいと思う。かく云う私も影響を受けた一人で、全国の映画館に日本ニュースを上映して知られた(社)日映に入社、ニュース以外の映画を製作したが、マッカーサーの指令で戦意高揚の映画を作ったとの事で同社が解散を命ぜられ失職した。

第七回42期総会は昨年の百年祭に合わせ十月十三日、湯の川グラウンドホテルで行われた。出席者四一名。次回は平成十一年七七才喜寿の会として再び函館で開催を決定しています。

第43期・函中一六会

(昭和16年卒)
井筒 吉彦記

われわれの期では函館・札幌・東京三地区の幹事が交替で当番となり、毎年同期会を開催しているが、今年は札幌が担当して六月二十日定山溪グラウンドホテルで行われた。

当日は夫人・未亡人四人を含む二十八人が出席し、午後六時から瑞鳳の間が始まった。札幌幹事の挨拶によると、今回

百二十五人の同期生に案内状を発送し、郵便戻りが三通あったが、本人や奥さんの病気などによる欠席が多く見られたとのこと。しかし、出席者の中に、西宮市に住んでいて昨年大震災に遭い、連日の水運びで腰を痛めて入院していた丁君夫妻の元気な顔を見て、全員から祝福を受けていたのが印象的であった。

卒業以来五十五年、初めてという仲間もいたが、話しているうちに昔の面影や話しぐせが滲み出て、なつかしさを感じ出すという



(13) 東京白楊だより

光景があちこちで見られた。アルコールが進むにつれて、向こうで五・六人、こちらで四・五人とグループが何かしら声高に話し出す状況も見られ、時間の経過を忘れる程であった。

しかし、さすが年齢には勝てず、八時過ぎ校歌「玄冥の…」を斉唱して、各自部屋に引きとった。K君とT君から、土井晩翠がこの校歌を作詞した際の舞台裏が披露されたのは興味深かった。

翌日、朝食後ホテルのバスで札幌市内まで送ってもらい、来年函館での再会を約して解散した。

第44期・獅子の会

(昭和17年卒)

日野文麿 記

44期の同期会は去る四月六日(土)銀座三笠会館で開催。参加者十二名、十五名の予定が直前になって、入院手術に見舞われ三名、不可能。年齢を考えさせられまじった。近況報告より爽りある一日を過ごしました。

44期二百五十名中、逝去者は七十名です。東京支部会員中昨年亡くなられた方は、鎌田実君、石塚和雄君、東義一君、高橋豊治君の四名です。謹んでご冥福をお祈り致します。

第45期・翠楊会

(昭和18年卒)

田沼 修二 記

今年の翠楊会東京支部の集いは、二月二十四日(金)昼・青山にあるNHKの青山荘で開いた。五十余名の会員中二十三名が参

会、開会冒頭に最近逝去された速見吳君をはじめ、鬼籍に入った友人達に黙禱を捧げた。幹事から経過報告の後、函館本部から来会された福士長蔵君より函館のクラスメートの消息を聞く。乾杯のあとはコップを手に忽ち五十年の懐旧談の華が咲く。その間を縫って近況報告があり、全員が古稀を迎え、殆どが第二の勤めも終えて悠々の余生を楽しんでいる。しかし、病を得て欠席する友人も次第に増えつつあるのも、残念ながら止むを得ないことであろう。最後に懐かしいの校歌を合唱し、次回を約して散会した。

第47期

(昭和20年卒)

松村 豊 記

昨年の十月十三日、百周年記念の同期会が、函館・湯の川「入川」で開かれ、四九名が参集し旧交を暖めた。うち東京からは十三名の出席をみました。

今年の同期会は、47期にちなんだ四月七日(開催日は毎年変更なし)に有楽町・ニュートーキョー1・6Fで開催した。

北海道から小田原要四蔵、成田庄司、仙台から池田知行、大阪からは山下一雄の諸兄が遠路にかかわらず出席。それに東京の同期会に初参加の松田博を加え、二十二名と例年通りの盛況で、昔に帰った数時間を過ごし、春宵の中、タイムトンネルをくぐってしました。

もう間近に七十才になる面々の元氣さと若さに幹事は脱帽。

でも帰途が余り遅くなるといふ懸念から、去年からは五時開宴と決め、昼に開くのは喜寿を迎えてからでよいという意見が圧倒的。さて、諸兄の若きことよ……。

第51期・あずまし会

(昭和23・24年卒)

三國比左男 記

51期「あずまし会(函中どんじり会東京支部)」の総会と懇親会が四月一三日、日比谷「聘珍楼」で行われ一九名が出席しました。

特別参加のどんじり会長西村源太郎君が「百周年の募金目標額達成(ベストテン入り)」について謝辞を述べ、次いで卒業五〇年記念大会を函館で平成十年十月十日に挙行決定と発表、大いに雰囲気盛り上げてくれました。

会務・会計報告共承認され、役員改選も全員が再任となりました。懇親会では、昨年の母校百周年記念どんじり会前夜祭の楽しかったこと、卒業初参加者の話、物故者の思い出話等に時間が過ぎました。

解散後も土曜休業の店を開けての二次会に十人が集まり、カラオケ等で元氣なところを見せました。

第54期

(昭和27年卒)

佐藤 正郎 記

はじまり 同窓会名簿で調べると、わが期の逝去者は三三名、逝去率八・

六%である。十年先輩は二四・四%、十年後輩は三・一%、奇しくも逝去率は十年ごとに二・八倍となる。

なかみ

「最初は昭和四九年六月、池袋だったわ。」と通勤電車で一緒になるテルコさん。以来二年、会は休みなく続いた。上京者がある何人かが集まる習慣ができ、その集まりでの「伊東で岩沢先生に会った」が伊東での卒業三十五周年全国大会に発展した。

六月の第一土曜日、幹事が場所と運営に工夫をこらす。深川から屋形船を仕立てたり、関西在住者の要望に応じて京都で開催したり……。今年是一次会が全日空ホテルで、二次会は銀座のバーである。出席者二八名、ひっくり返るような大騒ぎと、ほのぼのの通り合う友情はいつも変わらない。ただ常連タムラ君の突然の死に寂しさを隠せなかったが……。

おわり

評判の『脳内革命』は「病は氣から」が真実であると説く。すなわち脳はストレスによって悪玉ホルモンを製造し、楽しさによって善玉ホルモンを生産する。善玉の継続的生産によって、人は一二五才まで生きられるという。

同期諸君、楽しく生きよう。善玉ホルモンを能動的に生産し、逝去率をひと桁に維持しよう。そして同期会もその一大生産の場であり続けようではないか。

来年は卒業四五周年。同期会も一泊の計画である。

第63期・午末の会

(昭和36年卒)

小林 嘉則 記

平成七年は函中百周年に合わせたの行事が重なり、同期会も東京と函館でも開かれました。十月十四日の同窓会が終了した夕方から湯の川グランドホテルに集合。夕焼けに染まっていく函館山と大森海岸をバックに楚火を囲みながらのビールファイヤーは何とも云えない心地良さでした。加藤、渡辺両先生に出席していただいて七〇名の席上、百周年を機に会の名称をつけようという事で決定したのが「午末の会」。ウマ年とヒツジ年が



中心になつていふという事で命名されたものの『ゴミの会』と語呂が悪く今ひとつ女性に不人気でしたが、本当のゴミにならない様に戒めをこめて一致団結といきたいものです。

平成八年の東京同期会は十四回目を迎え、『年末の会』命名第一回目となりました。集まったのは三〇名程でしたが、函館から渡辺親夫、柳田音昭君、札幌から本谷宣彦君、仙台から鈴木祥介君、京都から本城美智子さん、三重から橋本穂子さん、念願がなつて初めて出席できた亀田利昭君を含め、めずらしい顔ぶれがそろいました。そしていつも驚かされるのは、前ぶれもなくアメリカから到着して駆けつけてくれた打越光輝夫君忙しい国際人とはいえそのエネルギーには感服します。

これから益々大変になっていく年齢だけに来年も又元気に集まってもらいたいと思つております。

第65期・函中三八会

(昭和38年卒)

菅原 大作 記

今年の函中三八会は、七月六日(土)、午後六時より、東京・有楽町の「ロチェスター」で行われた。

同期会は、昭和五二年に第一回目を行つて以来、毎年一回実施してきた。そして、ここ数年は、七月の第一土曜日を開催日として固定してきたが、毎年行うために何時でも参加できると考えるためか、参加者が大きく増減することなく、毎回三十人程度に終始している。もっとも、年によりメンバ



ーの入れ替わりがあることから、ここ四、五年の延べ人数では四十人程度が参加していることになる。

今回は、盛岡市、酒田市、長岡市、前橋市といった遠来の参加者も含め、男一九人、女八人の計二十七人が参加した。なお、この日の参加者には、例年と同様に欠席者から届いた近況報告と、最新の住所録を印刷して配布した。

今回は、卒業後始めての参加という佐々木紀一、東樹亨両氏、寺川(高橋)幸子、八木橋(照井)厚子さんのほか、久々に出席した加藤恒明、中里清敏、西田守、吉沢隆雄の各氏と古谷(戸村)千里、奥富(岩崎)和恵さん、さらに全

く同じ店の別室で小・中学校(学芸大学付属)の同窓会に出席し、遅れて参加した山初省吾氏など、毎年の参加者に加え、懐かしい顔触れが揃った。

会では、最初に、昨年十二月に急逝された川崎正人氏に黙祷を捧げた後、久しぶりの再会を祝して、中里氏の音頭で乾杯し、しばらくの間、懇談に移った。一年一回は顔を合わせる仲間とは言え、卒業以来初めて会ったという人なども多く、お互いが三十三年前の高校時代に戻

つて積もる話に花が咲いていた。そして、各人の近況報告を行つたが、昔は無口(?)と思われていた人もそれぞれ歳をとつたせいがか、皆饒舌となり、手短かにという制約も何処吹く風のように、近況についてはもちろん、卒業後の三十三年間の総括をしかねない人もあり、時間調整に手こずる事になった。この後、早めに記念撮影を行い、その後は時間の許す限り、お互いに席を代えては高校時代のお思い出などに話が弾んだ。午後八時三十分過ぎ、終了時間となり、次回の再会を約束して閉会としたが、皆なおも別れがたく二次会、そして三次会へと……流れた。

第67期・志丸会

(昭和40年卒)

松田 幹夫 記

まずは美女たちの空港までの出迎えから始まり、大沼周遊、ゴルフコンペ、合同志丸会、一〇〇周年記念祝賀会、いずれも参加した人たちの感想は皆が大変感激しております。三〇周年記念合同

志丸会には河内孝介君の計らいで湯ノ川プリンスホテルで行われ、まず森元君の第一声で幕が開き、修学旅行の生徒の關係上慌ただしく記念撮影を行い、同期で今まで亡くなられた一〇人の名前を川原京子さんが読み上げ、その後一分間の黙祷をし冥福を祈つた。その後は乾杯の音頭は私(松田)が取り、料理は函館近海で捕れた活きのいい魚の刺身の船盛り、毛蟹の山盛り(一人一ぱいづつ?)その他沢山ありました。が省略、美味しい料理を食べながらゴルフコンペへの表彰式、次に参加者七五名の各一分位のスピーチ、最後にこの式典の世話役山崎君が締めくくり、五年後(二〇〇〇年祭)には札幌で、一〇年後(還暦)には東京で会う約束して、校歌斉唱し、札幌志丸会幹事の西堀君が閉会の挨拶、最後にはもと応援団による志丸会へのエールにて、合同志丸会は大盛況のうちに幕を閉じた。

この後は同ホテルのスナック「海峽」でカラオケ大会、時のたつのも忘れて歌つた。次の日一四日は有志数十人で

横田君の家を訪れ、ご仏前に線香と東京志丸会の写真と、昨日撮つた記念写真をあげ、志丸会の大盛況ぶりを報告した。

その後のモダンな校舎に生まれ変わった中部高校校舎、体育館などを見学し、パンテオン様式の正面玄関をバックに記念写真を撮つてきました。

昼からは、函館市民体育館で百周年記念祝賀会が行われ出席者は約一五〇〇人の大祝賀会でした。私が感激したことは加藤正之先生に三〇年ぶりに会い私の顔を見て「松田君だね」と云つて頂いたことです。先生は何年経つても教える子の名前を覚えていてくれるのかと感激した次第です。



白楊魂とは



函中の百年の歴史を遡ると、そこには必ず「白楊魂」という言葉が顔を見せる。

函中生ならば入学した時から折にふれて耳にしている言葉だろうが、「白楊魂」とはいつたい何だろうか。ここでは改めてその意義について考えてみたい。

まず第一に、これを探る手がかりとして挙げられるのは、「白楊魂」の由来である。由来、それは一言でいえば文字通り「白楊」という言葉の意味から来ている。

「白楊」「ポプラ」。つまり、白楊とはポプラの木を意味している。すべての根源にあるのはポプラで、そのポプラを理想としてこの「白楊魂」は作り出されたのである。

校庭には古くからポプラの木が植えられていたそうだ。（現在は駐輪場の前に残っている。）

四季の移り変わりの中で風雪に耐え、常に変わることのない力強さで土に根を張る、そんなポプラのたくましい姿が函中生の理想の姿と重なってこの精神が生み出されたことは紛れもない事実であろう。

函中の歩はまさにポプラと共にあるのである。

話をすすめていくが、昭和三十年、本校の大根田資雄校長は新生にこんな言葉を送っている。

「白楊魂」これは本校に学んだものの合言葉です。一言でこれを説明することはできないが、各人各様の解釈で、それぞれの立場により体得されるものであってもよいだろう。」

確かに「白楊魂」とは正確な定義の出来ないものである。しかし、定まった形をもたないからこそ、それがメリットになっているとは考えられないだろうか。ここで重要な鍵を握るのが函中の校風、「自由さ」である。函中では昭和四十九年十月に正式に制服制度が廃止された例をはじめ早くから生徒の自主性が培われてきた。

実際、いまの生活を考えて欲しいのだが、服装や持ち物、校内外の生活についての規則もさほど厳しくはなく、至って自由が尊重されているといつてもいいはずだ。この自由さのものは、すべての責任や判断は個人一人ひとりに委ねられる。もちろん、それが幸いするとは限らずかえって仇となってしまう場合もある。「白楊魂」に託された真の意味はそこにあるのではないだろうか。「自由」という

難しさを個々の価値観をもった一人ひとりがどう受け止めるかと言う点に……。つまり、「白楊魂」は一人ひとりの自由を促すと同時に、試しているものであるのだ。これをいつ、どこで発揮するか。普段の生活、部活などそれも自由なはずだ。学校の教育方針として文武両道が掲げられているのも広い視野の形成を目的としているのだから。問題は「白楊魂」の意義を忘れないこと……。言い換えれば、前向きな姿勢で日々「自身」の向上を目指すことである。「白楊魂」は、長い歴史を通じて変わらぬ強さを持つと同時に、時代とともに淘汰され磨かれてきたひとつの光である。これを維持し、より良いものに変えていくことが函中生の義務ではないだろうか。逆に言えば、逆境の中でも自分で「白楊魂」見つけたせる者こそが、真の函中生であると言えるのかも知れない。

下段の記事「現代の函中生」を含むふたつの文章は、函中百周年を迎えた平成七年十月十四日発行の「白楊時報」からの抜粋です。現役函中生の気・心を知り得る記事として掲載しました。

現代の函中生

新聞局編集長 高山 晋

入学当初から思っていたのだが、この学校にははじめのある生徒が少なく、さらに自分勝手である。他校も同じようなものだが、我が校の場合は教師が厳しく管理をしない。別に目新しいことではないが、しかしみなさん、なぜ我が校ではそんな状況なのであるのか。

「うちの学校は自由な校風だから。」という答えはすぐにかぶさる。ではその自由さはどこから来ているのか。そう考えると中部の生徒ならば「白楊魂」を思い浮かべるだろう。

この学校には、「白楊魂」という摩訶不思議な校訓が、はるか昔からある。「自主自立」、「自由闊達」をうたったもので、中部高校の売りとして存在した。生徒は校訓というものに悩まされることなく、自由に発言し、自由に行動できるのだ。しかし最近少し曲解されているようだ。生徒は、「自分の立場を考えず」発言し、「自分勝手に」行動している。

本来この「白楊魂」は、「自主性」のある「自立」した生徒が、「自由」に行動できる、というものであった。中部に来る生徒は自律ができてくる大人であったから自由にできたのである。しかし現在の様子を見ると、最近の高校生は親の過保護や、義務教育の生徒を一種の機械のように考え、型にはめる教育のせいで、自主的に行動できていない。そういう現

代っ子が我が校の自由にふれるとどうなるか。これまで受けていた圧力が無くなったため、一気に自己の楽な方に流れていく。自律が確立していれば問題無いが、それを持たない生徒達は、必然的に我がままで、自分勝手になっていくのである。

それでは、どうすればこの悪循環を打開できるのだろうか。まず考えられるのは、自主性を失いかねない画一化した義務教育を減らす。そうすれば個性が伸び、自主性もやしなわれるだろう。親の過保護が増しそうだが、本来教育は親がするものである。しかし今の学校制度では、高校も義務教育化しかねないようだ。それでは方向を変えて、少しでも自主的な人を入学させるように、「面接」を導入してはどうだろうか。だが所詮このままでは、函館公立のトップで終わってしまう。

去年の惨々たる大学入試の様子で、中部高校の、市内では進学校、という幻想はくずれた。みなさんは我が身のことと思ひ、学習にはげんでいるだろうか。それとも周囲を見て、「他の人も勉強していないから何もしない」のだろうか。確かに何となく勉強しても、何となく生活しても、高校三年間は終えられる。しかしこの他人に流された生き方に何の意義があるのだろうか。成績の面だけでなく、普段の生活の面でも、高校生、社会人としての自覚を持ってほしい。みなさん、もう一度「自主性」というものと「自由」というものについて、深く考えてほしい。

白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ会 「第5回・第6回ポプラ会」報告記

63期・副支部長 小林 嘉則

春と秋、年二回開催のポプラ会も三年目となり、ここ二回の開催は女性の参加が急が増えてとてもにぎやかになりました。これも六〇期・松田栄美子先輩の呼びかけが功を奏しているのでしょうか。六〇期は特にめざましく、登録されているだけでも八名もいて、平成七年十一月常陽CCで行なわれた

第五回の優勝者信太紀二先輩は五七期の兄上より遅れての初参加でしたが、いきなり優勝されました。その時準優勝の河原木和子さんは八七で回り女性のベスグロでしたが、六四期の河原木義治さんとは同期生夫婦。御主人も八四でベスグロを獲得し、何ともスゴイコンピネーション振りを発揮されました。

第六回のポプラ会は東京支部の監事役をお願いしている四五期の田沼修二先輩のホームコース習志野CCにて開催。五月末の蒸し暑い中二五名が参加してくれました。さすがに名門コースで楽なゴルフはさせてもらえませんが、久々に出席された五九期の笠原静雄先輩が九〇で回り優勝。二上支部長のサイン入り扇子が特別賞として手渡される二重の喜びでした。同期のお仲間から誘われて初参加の三上和子さんは、ゴルフは始めたばかり……もう少し上手になつたらと

迷っていたら「貴女が上手になるのを待っていたらいつになるか分からないわヨ」と言われて出てきたもの大叩き。どんじりのブービーメーカーでしたが寄贈の田沼賞をいただいてニコニコ……、気楽なコンペを楽しんでもらえたようでした。次の回には汚名挽回を励みに練習の成果を見せてもらい



たいですね。今回の最年長は七〇歳を過ぎているとは思えない田沼先輩でしたが、ホームコースといえ午前の四六はさすが、暑くなつた午後はショットが乱れてしまいました。健康賞で労を痛めていただきました。年二回づつ六回目を終えて会員の参加者も多数になり同期、先輩、

後輩の関係は元より兄弟、姉妹、夫婦での参加と和やかな雰囲気が出てきた事は、すこやかなポプラの会らしくますます楽しくなってきました。連続出場の大坂の松岡先輩の六一期も女性の仲間が増え、孤軍奮闘されていた山本興太郎先輩の上達振りには目を見張りますが、それにつれて同期会コンペの様相を見せてきた六〇期のお仲間のまとまりの良さには感心させられます。

夫々の期でもお仲間同志でゴルフ

フを楽しんでおられる事とは思いますが、誘い合つて一度参加してみたいかがでしようか。平日開催の為にたたくてもなかなか……と言う方も多く、土曜日開催も検討したのですが、諸条件を考えますと難しい面もあるのが現状です。同窓会の一層の充実を旨として始めましたこのゴルフ親睦会を御理解の上、これからも皆様楽しい集いになっていただけたらと思っております。

(写真は、五月の第六回ポプラ会)

「第七回ポプラ会」開催のお知らせ

第5回は茨城で、第6回は千葉の開催でしたので、第7回になります秋のポプラ会は、GMG八王子ゴルフ場に決定致しました。ここは二上支部長のホームコースでもあり、西東京方面の方にはとても近いということで、第1回と4回に引きつづきお願いする事になりました。千葉、茨城方面から参加される方には都心を抜けて来なくてはいけませんので大変かと思いますが……ごぞつてお越し下さい。

第七回ポプラ会ゴルフコンペ

日時 平成8年11月12日(火)
場所 GMG八王子ゴルフ場 京王線八王子駅よりクラブバス
集合 8時よりフロント受付
スタート 9時3分 西コース 8組32名まで
会費 6000円(プレー費他各自清算)

参加申込

1. これまでに参加された方には御案内と返信ハガキを送付致します。
2. 初めて参加される方で案内を送ってほしい方は氏名、住所、電話をお知らせ下さい。
連絡先 同窓会事務局 (FAX 03-3358-6281) 又はゴルフ部会世話人 小林 (FAX 03-3424-6854) にFAXを入れて下さい。
3. 本年の東京支部同窓会第20回親睦大会(10月18日)の会場でも受け付けますので申し込みして下さい。



会員短信

ひょうご

メッセージ

数越 甲平(35期・昭和8年卒)
八〇歳を超えると全時代(学校、軍隊、社会)の友人の逝去報が急に多くなり、名簿から次々と名前を抹消するのは嫌ですネ。

佐々木孝允(35期・昭和8年卒)
毎年十月には環日本海の行事と重なり大会に参加できず、残念です(中国語通訳ボランティア)。年会費改定は当然のことと思っております。

佐々木八郎(36期・昭和9年卒)
二上会長の「何気ないひと言の重み」(第一八号掲載)に、なるほどと感心しました。

三国 栄徳(36期・昭和9年卒)
百周年の里帰りが健康状態悪化で実現不可能。誠に残念。後輩諸君の益々の御健康と御活躍を祈念しております。

村井 保(37期・昭和10年卒)
御連絡ありがとうございます。私も老妻も小康です。函館には年一度墓参のため帰ります。

釣谷 光博(37期・昭和10年卒)
減量のため一万歩目標にせよと歩いたら、足がしびれてきて「神経内科」の門を叩く仕末。全く歳はとりたくないもの。

樫田 和彦(39期・昭和12年卒)
37・40期合同座談会を拝読して、小生在校時の先輩、後輩の方々なので懐かしく当時を思い起こしました。室谷邦雄先輩は私の亡き兄の五年の時の級長で、佐久間先生が担任だったと思います。兄は岡山医大在学中結核で死亡しました。遺愛女学校の記事がありました。小生もうっかり近道して校庭を横切つて先生に見つかり、油を絞られた経験があります。

現在、55期三橋晃夫氏を事務局として、「関西白楊ヶ丘の集い」の企画中です。

林 正純(40期・昭和13年卒)
従来とはかなり異なつた方針で編集されたと思われる第一八号を興味深く拝見。とくに、37・40期合同座談会は、昭和十年前後の函中の面影をかなり正確に伝えていると思う。しかし、事実と異なっているように思われる点、函中が美化され過ぎていられるように思われる点なども……。また、「歌で綴る恩師の横顔」は、正に簡にして要を得ていて極めて秀逸。

会費納入率の大幅改善のために、支部幹部の一層の御尽力を御願ひ申し上げます。

室谷 国男(40期・昭和13年卒)
在京関係者も多数との事ですが、会費の納入少なき由、残念な事と思います。

有田 正也(43期・昭和16年卒)
年齢相応に診療に従事しております。第一八号の37・40期合同座談会は、昔を想い出しながら、懐かしく拝読致しました。

浦田 常治(44期・昭和17年卒)

「まほうのめがね」「青春マラソン」「ロボット君」御希望の方に楽譜を差し上げます。

村上 国男(45期・昭和18年卒)
何とか会社の片隅で、OEMだとか製品輸入の実現に、微力ながら手助けをしています。二重構造の日本経済もサバイバル必至。でも、勤勉な日本人のこと、何とか乗り切らねばならない。

田沼 修二(45期・昭和18年卒)
第一八号は、内容充実して大変結構でした。

篠田 作衛(48期・昭和20年卒)
今年は記念すべき年に当たります。東京支部大会はもとより、わが郷土での百年祭でも嬉しい思い出を綴つて来たいものです。

宮本 栄輔(51期・昭和23・24年卒)
支部大会には出席できませんが、十月の百周年で函館へ参ります。秋イカをタラフク食べるつもりでいます。

山下 二郎(52期・昭和25年卒)
毎朝のラジオ体操が健康の基。皆様もぜひご参加を。母校・支部の益々の充実を祈る。

太田 輝夫(52期・昭和25年卒)
だましました健康を保つことに窮々としている昨今です。出来るだけ若い人と付き合ひ精気を頂戴しています。

池田 正文(53期・昭和26年卒)
小生は日本の風景を描く事で年に二・三回個展を開いている洋画家です。十二月には池袋東武で個展をします。

佐藤 秀(56期・昭和29年卒)
伊豆高原にてペンション「サウインドバンク」を開業。親睦会等に

是非御利用下さい。美術館多数点在。

小林 重行(59期・昭和32年卒)
八年間の米国生活を終えて六月帰国しました。丁度百周年のタイミングに合致したので出席したいと考えてます。

伊藤 征子(59期・昭和32年卒)
この春三十八年振りに訪れた函館。函中の前に立って目を見張るばかりでした。五稜郭公園の桜、元町のモダンな黄色い建物・旧函館公会堂、そして旧友との語り、それはそれは懐かしさでいっぱいでした。百周年行事の成功を祈ります。

上平 慶一(60期・昭和33年卒)
両親が亡くなったこともあり、この数年はふるりに帰っていません。「ふる里は遠くにありて想うもの」で。しかし、歳を重ねると共に、懐かしく思い出しています。

伊藤 紀子(60期・昭和33年卒)
会報の字が大きくって読み易くなりましたね。例年夏には帰省して、親孝行の真似事をしておりますが、今年は母校の前で写真を撮つて参りました。百周年の十月には旧友と何人逢えるか、今から楽しみにしております。

笠井 清(63期・昭和36年卒)
関西復旧工事担当営業ゆえ、多忙で大会に出席できません。

村山久三子(64期・昭和37年卒)
勤務先が神戸にあり、大震災の後、何が何だかわからぬうちに半年以上過ぎました。最近事務所が移転してようやく少し平静を取り戻しました。神戸全体の復興には、まだ随分かかりそうです。

林 千恵子(69期・昭和42年卒)
鹿児島商工会議所は函館と姉妹関係を結び、所内には函館コーナーもあります。

山本 陽子(69期・昭和42年卒)
百周年の盛会に感動しました。板垣 裕則(70期・昭和43年卒)兵庫県へ単身赴任中です。地震で寮が全壊しました。得難い体験でした。

川村 哲雄(71期・昭和44年卒)
今年の大会は祝日開催。同期の数多くの仲間と会えるのを楽しみにしています。

五十嵐信博(74期・昭和47年卒)
久しぶりに帰郷したので、立派になった母校を見て来ました。周りの家々も様子が変わり、時の流れを感じたことでした。

松田 司(78期・昭和51年卒)
垣坂君の青森駅での表情、なんとなく覚えています。(会報十八号)思い出のひとつ。昨年七月大阪に住み、家族連れで京都・奈良に行つてます。

福島 陽子(79期・昭和52年卒)
今年は百周年なので新しい校舎も見たいと思いましたが、なかなか函館へも行けません。来年の夏休みには是非、子供たちに函館の街を見せたいと思つています。

米田 考(79期・昭和52年卒)
同窓会に東京支部があつたなんて、今まで全然知りませんでした。今後はしっかり会費を納入します。ので、よろしくお願ひします。

小西眞由美(79期・昭和52年卒)
母校を外からですが見て来ました。心地よい圧迫感があつて素晴らしいです。

評議員会報告

69期・副支部長
梅田やよい

平成八年度の評議員会が、四月十九日、アルカディア市ヶ谷で約三名の出席で行われた。

午後五時三十分、二上支部長の挨拶のあと、菅原・真船両副支部長より、平成七年度の事業及び収支決算の報告があり、田沼監事からの監査結果報告を受けて承認された。続いて、平成八年度の事業計画、予算案が提案説明され、原案どおり承認された。

このほか、組織を強化した結果、年会費収入が三名以上増加したので、引き続き組織強化を図りたいこと、そのために「ミニ評議員会」を続けたい、ことなどが菅原副支部長から発表があった。また、小林副支部長からは、「東京白楊だより」第十九号に關しての説明と原稿依頼の要請が、高木副支部長からは、親睦大会に關しての、企画案や意見の要請があった。

そして、午後六時三十分、会議

平成8年度東京支部 会計決算書

収入の部	
前年度繰越金	¥4,669,470
総会費(152名)	¥1,216,000
年会費(1,201名)	¥3,603,000
利息収入	¥100,240
雑収入	¥114,500
計	¥9,703,210

支出の部	
総会関連費	¥1,446,917
会報関連費	¥963,659
事務費	¥886,165
会議費	¥184,883
その他	¥597,400
次年度繰越	¥5,624,186
計	¥9,703,210

は開会されたが、そのあと、「二次会」として、会場を替えて会費制の食事が行われ、「ミニ評議員会」さながら和気あいあいの雰囲気の中、活発な意見があちらこちらで交され、予想以上の親睦が図られた模様で、この初めての試みは成功を納めたように思えた……。

なお、昨年度、年会費納入依頼の際、いくつかの期の評議員のミスで前年度納入に關してのプリントの入れ違いによる誤りがあり、多数の方にご迷惑をお掛け致しました。執行部からの連絡不行き届きを、お詫び申し上げます。

逆に、平成六年度分も併せて送金下さった方々もたいへん数多くおられました。それらも含めて約三分の増収を見ることができました。

紙面を借りてご協力に感謝致します。そして、本年度もまたよろしくご協力の程、お願い申し上げます。

訃報

初代支部長、齋藤鎮雄氏（大正8年卒・第21期生）平成八年二月十四日午前四時三十分、慶應病院で長期療養して居られましたが薬石効なく、九十三才という高齢で天寿を全うされました。ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

初代支部長

「齋藤鎮雄氏」を惜しむ

52期・昭和25年卒
監事 小泉 龍彦

昭和五十二年十一月二十二日、白楊ヶ丘同窓会東京支部が誕生した。初代支部長は齋藤鎮雄氏、設立準備世話人が萬場一政でお願いした支部長だった。戦前から在京函中会があり戦後も昭和二十六年にその集いがあったと聞いている

がそのほとんどが同年代の有志であり、亀井勝一郎、渡邊紳一郎氏等有名な方々の集まりだった。二十数年を経て本格的な函中同窓会の東京支部をつくらうと気運が高まりそれでは齋藤氏に支部長をお願いしようと思っただけでなく、五十二年の春だった。

株式会社松屋の会長だった齋藤氏は多忙の中、支部長を引き受け

るからには、未来に向かつて翔ばたけるものに育てなければならぬ。旧制、新制だと意見があるようだが新旧全ての会にすべきだ、名称も母校の象徴であるポプラをとって「白楊ヶ丘同窓会」としよう、とまとめ上げた。

『同期会が枝葉なら同窓会は幹』、枝葉をすくすく伸ばすためにも幹は太くたくましくなくてはならない。と名言を言われ、初代支部長に就任された。

第一回支部総会がマツヤサロンで開催され三百六十六名の東京在住の会員が集い、壇上の齋藤支部長の名演説で今日の「白楊ヶ丘同窓会東京支部」がスタートした。とにかく二年間の就任期間にしっかりと土台を作らうと指示、組織だったものにしなければ、そのためには規約が必要、そして「名簿づくり」を早急に果たさなければと自ら積極的に会の運営に動いていた。その情熱、基礎固めが確かなるが故、今日第二十回を迎える東京支部発展の姿があるのだと言っても過言ではないであろう。

平成八年二月十四日御逝去の報を聞き、我等が函中卒の巨星を又失ってしまった。残念でならない。時の流れの定めと言っても止められるものだったら止めたいものだ。輝ける初代支部長齋藤鎮雄氏を偲んで皆で合掌しよう。

齋藤支部長、有難うございました。



東京支部

設立の経緯

白楊ヶ丘同窓会東京支部は、昭和52年11月22日に結成された。しかし、唐突に設立されたのではなかった。その母体は戦前から函館中学卒業生による親睦団体「在京函中会」があり、故阿部良平氏（19期）、故永井一郎氏（21期）、和田貞一氏（24期）、故北川有光氏（26期）等大先輩によって連絡と受け継がれてきたものがあつたのである。

昭和50年10月頃同窓会会長故美馬隆夫氏（25期）と母校の横田忠康先生（37期）から新制高校卒業生も含めた組織づくりの要請が再三にわたって前記諸先輩になされ、齋藤鎮雄氏（21期）を委員長、故北川有光氏を副委員長とする、『東京支部設立準備委員会』が設けられ、新旧の境目に当たる伊東克郎氏（49・50期）、三國比左男氏（51期）、小泉龍彦・福津達男氏（52期）、佐々木順一氏（53期）等が委員となり、支部結成のため精力的な会合を重ねた。一方、伊東克郎氏を委員長とする『設立総会実行委員会』を設け、51期から69期の有志をメンバーに諸準備に当たったのであつた。

東京支部総会は、昭和52年11月22日東京千代田区平河町「マツヤサロン」において同窓生三六六名参集のもと盛大に開催され、初代支部長に選出された齋藤鎮雄氏は、「人間形成のうえで大きな影響を与えた母校は、有形無形でわれわれの人生と共にある」と力強く述べられたのが印象的であつた。



第20回親睦大会

10月18日、アルカディア市ヶ谷で

講演「ストレス時代の心とからだの健康」

●講演者プロフィール●

山本 晴義 (医学博士)

一九四八年(昭和23年)東京生まれ。中学二年の時、的場中学校に転校。思春期を函館中部高校で過ごす(第68期・昭和41年卒)。

一九七二年東北大学医学部卒業後心身医学を学ぶ。一九九一年新設の横浜労災病院心療内科部長に。

「頭が痛いというのは、頭痛の種、つまり悩み事があるのです。肩こりは重荷を背負っていることなのです。借金で首が回らない、という言葉がありますが、私は、実際にそういう患者さんを診ました。借金で首が回らないなんて昔の人はよく言ったものだと思ってしまうが首や肩はストレス状態を表わしているのです。」

これは、こじつけではありません。歴史なんです。今の人間がそういう言葉を作ったのではなくて自然の人間の観察の中で、あるいは

は自然の生活の中で、体の症状は心を表わす、と言われてきたのです。」

と語ってくれる山本晴義氏は函中68期生。

『心のオアシス』白楊ヶ丘同窓会東京支部恒例の第20回親睦大会の特別講演「ストレス時代の心とからだの健康」は十月十八日(金)昨年と同じ市ヶ谷駅前「アルカディア市ヶ谷(私学会館)」で五時から催されます。

現代はストレス社会といわれ、受験、学校、家庭、社会、人間関

東京大学教育学部非常勤講師。

診療のかたわら『ストレス時代のヘルシーライフ』をテーマに各地で講演活動を行う。自身のストレス解消は、ジョギング、カラオケ、アルコール。体協公認スポーツドクターで、プロサツカー、女子

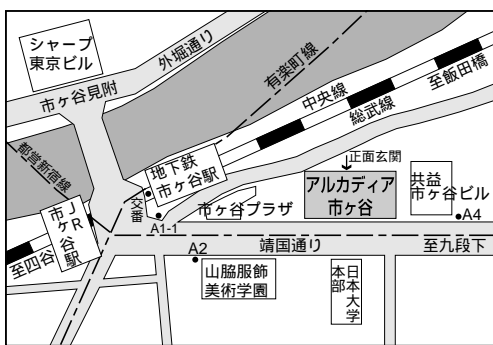
係すべてにおいてストレスを感じないで日常生活を過ごすことが出来なくなっています。でもたまには同窓会に出るのもストレス解消になるかもしれませんヨ。

講演では、ストレスによっておこる『心と身体の病氣』を紹介した上で、身体健康のために、ストレスとどうつきあうか、リラククス法についてのお話しをしていただく事になっています。

尚講演はパーティー会場とは別室にて五時開演です。お早めにお越し下さい。

子バスケ、陸上競技のトップ選手のメンタルアドバイザーも務める。一般向け著書に『ストレスに勝つ』『ストレス・精神疲労の治し方』『人間関係ゲーム』『失敗しないやせ方』『ストレス教室』などがある。

アルカディア市ヶ谷(私学会館) / 〒102千代田区九段北四、二二五 / 電話03-3261-9921(代表) / 市ヶ谷駅徒歩二分 / JR中央線・営団有楽町線・南北線・都営新宿線



編集後記

平成七年十月、函中創立百周年という滅多にない大イベントが終わり、関係各位ひといきといったところですが、「東京白楊だより」の編集は夏の盛りとぶつかって大忙しとなる。

今回の19号は特にテーマらしきものもなく、百周年に参加された各期の状況報告のまとめと想っていたところ、投稿の記事も多く、函館のにおいがする写真をなるべく入れて編集してみたら四頁も増えてしまった。ある期は一頁半にせよと原稿量だったが、カットさせてもらった。

関西支部発足までの経過報告も幹事・事務局の皆さんの御苦労が良く分かり、益々楽しい会になってもらいたいと願うものです。

編集人こそ多忙時にあたり諸々行き届きの面あり御許しの程お願い致します。

発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
発行人 二上 達也(52期)
編集責任 小林 嘉則(63期)

【東京事務所】

〒160 新宿区新宿1-14-6御苑ビル
スパース販売(株)内
TEL・FAX 03-3352-6281